

# 草庵仏教

第145号  
(発行日)  
2002年7月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
mail: kimyou2@siren.ocn.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

《 聞法会ご案内 》  
\* 同朋の会 (念佛寺)  
22日午後2時  
.....  
\* 聖典講座 (念仏堂)  
第1土曜日午後3時  
\* 念仏座談会 (念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 神参りについて

**Z** 「私は真宗門徒ですが、神社にお参りしてもいいのですか」  
**J** 「かまいませんが、どういう気持ちでお参りされるのですか」  
**Z** 「家内安全や健康や商売繁盛などを祈願します」  
**J** 「真宗門徒のたしなみは神仏にそういった祈願はしないのですか」  
**Z** 「どうしてですか」  
**J** 「そうした祈願は、自己中心的な願望ですね」  
**Z** 「自己中心的というのは」  
**J** 「自我を中心に据えて生きようとする事です」  
**Z** 「自我とはなにですか」  
**J** 「本来、物事を分別し選択する当体(機能)です」  
**Z** 「物事をああでもないこうでもない」と分別し思案し、選択し、決める働き(主体)ですね」  
**J** 「そうです」  
**Z** 「そうすると自我がなくて人間の生活はできないですね」  
**J** 「ですから自我は人間生活にはつきもので、自我がそのまま悪というのではないですね」  
**Z** 「私には自我と聴くと悪いイメージが浮かびますが」  
**J** 「自我そのものは悪とはいえません、人間の心には自我に執着する我執の煩悩があります。」

その我執の煩悩で自我が汚染されてしまいます。そうすると自我は自分と自分以外とを分けて、分けた自分に愛執し、自分の望ましいものをむさぼり、望ましくないものを嫌悪する、いわば自我への執着から愛(貪愛)と憎しみ(瞋憎)が限りなく起こってきます」  
**Z** 「凡夫の自我から愛憎の人生が生まれてくるのですか」  
**J** 「好きなものと嫌いなもの、愛するものと嫌悪するもの、愛する人と憎む人、好ましいものと腹立たしいもの、欲しいものといやなもの、望むものと避けたいもの、いわば貪愛するものと瞋憎するものが次々と生活の上に現れてきます」  
**Z** 「例をあげてください」  
**J** 「生きるのは好ましいが死ぬのはいやなこと、健康は愛好すべきもので病気は嫌うべきもの、裕福は望ましいもので貧窮は嫌悪すべきもの、成功は喜ぶべきことで失敗は悲しむべきこと、味方は好きで敵は嫌い、名誉は欲するもので不名誉は嫌うべきことなどで、愛好すべきものをむさぼり、嫌悪すべきものには瞋憎して生きているのが凡夫の人生ですから、悲喜苦楽の中で浮沈し続けるばかりです」

**Z** 「そのことと神さんに祈願することとが関係するのですか」  
**J** 「ええそうです。私たちの神仏への祈願は自我の煩悩である都合のよいものをむさぼり都合の悪いものを嫌悪するという心でお参りしています。自分の願望がかなうように祈り、自分の忌み嫌うものが来ないように祈るという私たちの神さん参りは、こうした煩悩にもとづき、煩悩を離れようとするよりも助長していく行為だといえますよ」  
**Z** 「商売繁盛を祈り、病気になるりませんようにと願う心がすでに生を愛し死を憎んでいる煩悩がそこにひそんでいるのですか」  
**J** 「常に(ああなりたい、こうなりたくない)という自我の愛憎を元に考え、自我の願望を満足させることを中心に私たちはとかく神仏に祈っています」  
**Z** 「私の欲求をかなえたいという自我が中心になっているのですか」  
**J** 「ええそうです。ですから、神様に自分の都合のいい御利益を祈ったり、自分の都合の悪い災厄を除いてもらうために祈願するのは自我中心のなみなみです」

**Z** 「真宗門徒は阿弥陀様には願ひ事はしてはいけない。願ひ事は神様にすればいい」という話を聴くことがあります、これはどんなものでしょうか」  
**J** 「これも同じです。たとえ阿弥陀仏には願ひ事をしなくても、自我的な願望をかなえようとして神を利用し、神を自分の欲求に従属させようとするのですから、自我中心的な生き様であることに変わりはありません」  
**Z** 「神に願ひ事をするのは、神に自分の言うことをきかせようとする自我の心なのですね。自分の願望を満たすための手段に神々を利用する行為なのですか」  
**J** 「ええそうです。自分の願ひをかなえるために神や仏に従属させようとする、いわば自分の方が主人で神や仏を従者にしていきます」  
**Z** 「なるほど、神仏に私の願ひをかなえてもらおうとすることは神仏が中心でなくて自分の方が中心ですね」  
**J** 「ええそうになっています。本当は逆ですね。仏は順うべきお方で仏が主、私は仏に順うべき者で私は従です。主客が逆になってはいけません」  
**Z** 「では神社にお参りすることがあれば真宗門徒はどうお参りしたらいいのですか」  
**J** 「真宗門徒はあえて神社にお参りする必要はありませんが、もし何かの縁でお参りする事がある場合には、(どうぞ私を真実まことに出会わせてください、真実へと私を導いてください)とお参りされたらどうでしょうか」  
**Z** 「なぜそのようにお参りする

のですか」

**J** 「親鸞聖人は神々ことに善なる神々はご自身も仏法を求め、また仏法が盛んになるように仏法を護持する願いをもって働いてくださっている。だから神々を粗末にはならないし、神々には敬う心もちなさいと仰せられています」

**Z** 「善き神々を軽んじないで敬う心もちなさいといわれるのですね」

**J** 「そうです。ただ神々を敬っても神々に帰依してはならないと言われます。なぜなら神々は私たちに（仏法に帰依して救われてほしい）と願っておられるのですから、帰依の対象は仏法であって神々ではありません。神々に帰依するのは神々の本心ではないとの思召しです。涅槃経に

『仏に帰依せば、終にまたその余の諸天神に帰依せざれ』とあります」

**Z** 「それと先祖霊とか怨霊とか、そうした霊を祀ったり恐れたりしていますか、これはどう考えたらいいのでしょうか」

**J** 「死者の霊とか動物霊とか怨霊などよくいますね」

**Z** 「そうした霊は有るのでしょうか」

**J** 「有るか無いか私にははっきりと分かりません」

**Z** 「怨霊や動物霊などのタタリやバチを恐れることがよくあり

ますが、真宗門徒としてどう考えたらいいのでしょうか」

**J** 「真宗で悪鬼神と言われるのがそれらでしょう。（鬼）というのは広辞苑には

①死者のたましい。祖先の霊。  
②おに。人に災難をもたらす悪神。

とあります。鬼というのは死んだ人の霊をいったり、あるいは人に災害をもたらすものとして悪神といわれるものを鬼といっていますね。よく世間で、（成仏してない先祖の霊が生きている子孫に災厄をもたらす）という話を聴きますが、そういう霊はまさに悪鬼神と同質のものといえましょう。また外に、修行中の者を惑わせてさとりを開くのを邪魔する、そういう鬼も仏教聖典には説かれています」

**Z** 「先祖の霊がたたって病気になるったり商売が傾いたりする、だから先祖供養しなさい」ということを強調する宗教もありますね。たたって悪病を起こしたりいのちを奪うような怨霊とか悪鬼神とかいうものは本当に存在するのでしょうか」

**J** 「私は存在しないと思っ

ています。人間の自我への妄執が先祖の霊魂という実体的なものを虚構しているのだと思います。しかし、絶対にそういうものは無いのだと主張するつもりはありません。有るか無いかといわれたら、先ほども申しましたが、

人間の知覚には限界がありますから、有るとも無いとも分らないというほかないですね」

**Z** 「怨霊というのが無いならいいのですが、もしも有ったらどうしますか」

**J** 「別にどうもしません。ほっておくだけです」

**Z** 「どうしてですか」

**J** 「たとえ怨霊や悪鬼神がいても、それらが信心の行者の人生を破壊させたり不幸に落としたりできないからです」

**Z** 「なぜですか」

**J** 「仏に帰依する者にはタタリとかバチが無くなり、不幸そのものが無くなるからです」

**Z** 「信心の智慧をいただいているからですか」

**J** 「信心の智慧をいただくとはタタリとかバチとかいうものが無くなる？」

**J** 「ええそうです」

**Z** 「なぜですか」

**J** 「信心の智慧とは全人生のできごとを見る眼です。この眼を通して見ると、不幸や災難をタタリだとかバチだといっただけで恐れたりいやがったりしていた現象が、その意味を転換してそのままお念仏の大事なご縁と知らされるからです」

**Z** 「人生におこる出来事を見る見方が根本的に変わるのですね」

への恐れがあります。死ぬことを不幸と見ている見方が人生の基本にあります。ところが死ぬことが不幸で無くなると、今まで災難だとかタタリだと思えなかった事象が仏縁と見え、あるいは阿弥陀仏の大悲のまことと更にいただくご縁と知られてまいります」

**Z** 「そういう仏縁と見えてくると災難とかタタリと思っていた見方そのものが無くなってしま

うのですね」

**J** 「ええそうです」

**Z** 「信心の智慧はそういう眼と

なつてくださるのですね」

**J** 「ええそうです。ですから聖人の和讃には

願力不思議の信心は  
大菩提心なりければ  
天地にみてる悪鬼神  
みなことごとくおそるなり

南無阿弥陀仏をとなうれば  
四天王もろともに  
よるひるつねにまもりつつ  
よるずの悪鬼をちかづけず

と申されていますし、歎異抄で

は

（信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし）（本願を信じて念仏する

人には、あらゆる神々が敬ってひれ伏し、悪魔も、よこしまな教えを信じるものも、その念仏

の人生の歩みをさまたげることはない）

と書かれています。ここで魔界というのが怨霊とか悪鬼といわれるものを含んでいるといっ

いいでしょう」

**Z** 「悪鬼神や怨霊がたとえあつても、念仏をいただいている人

には畏れて近づかないと聖人には言われるのですね」

**J** 「ええそうです。ですからたとえ悪霊や鬼神がいても、そういうものにかまわず心を寄せなくていいのです。ほっておいた

らに恐れたりしがちですね」

**J** 「だから私は言うのです。タタリを言う人にタタリがあり、バチを言う人にバチがあり、怨

霊を言う人に怨霊がいるのだと」

**Z** 「なるほど」

**J** 「もう一つ言えば、怨霊もタタリも、その人の迷い心が生み出した幻影であるにもかかわらず、自らが作り出した幻影におびえている。これがことの真相だと私は思っています」（了）

# 歎異抄 第十二章第四講

当時、専修念仏のひとと、聖道門のひと、誣論をくわだてて、わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなりというほどに、法敵もいできたり。謗法もおこる。これしかしながら、みずから、わが法を破謗するにあらずや。

(歎異抄第十二章より)

現代語訳——(このごろは、念仏の道を歩む人々と聖道門の人々とは、お互いの教義についてことさらに議論し、「わたしの信じる教えこそがすぐれていて、他の人が信じている教えは劣っている」などというために、仏の教えに敵対する人も出てくるし、それを謗するというようなこともおこるのです。このようなことはそのまま、自分の信じる仏の教えを謗り、滅ぼすことになってしまおうのではないでしょうか)

専修念仏というのは専ら阿弥陀仏の御名を称えることです。専修念仏の人とは専らお念仏をいただいて称える生活をする人のこと、そういう生涯を送ることを選んだ人のことです。

法然聖人は浄土に生まれていく道をお示しになり、浄土に生まれていく道においてこの世を生きることが教えられました。その浄土に生まれる道は、阿弥陀仏の発された念仏往生の願に信順して一筋にお念仏を申していく道です。

念仏往生の願文は、仏説無量寿経に釈尊が阿弥陀仏の本願を四十八通りにお説きになり、その第十八番目の願に「乃至十念・若不生者・不取正覺」(たとえ十声なりとも我が名を称えるものを、もし浄土に生まれしめないようなら私自身が仏陀にはならない)とある阿弥陀仏の誓願のお言葉です。

この「我が名を称えよ」という本願に順って、お念仏を専ら称える生活をする人たちが沢山生まれました。そうした人たちは、法然上人の直弟子はもとより、直弟子に教えられて一筋に念仏申すようになった人たちを含めて「専修念仏のひと」と言われました。親鸞聖人も唯円房もそのお一人です。だから当然私たち真宗門徒も「専修念仏のひと」に連なるものであります。

専修念仏の人たちが多く生まれてくるなかで、専修念仏の他力浄土門の人たちと自らの修行の力によってさとりを開こうと志す自力聖道門の人たちが、どちらの道が優れているかを論争する、そういうことが時々あったのでしよう。

そういう時、必ずと言っていいほど「わが宗こそすぐれたれ、ひとの宗はおとりなり」と、お互いが自らが奉じている教えの勝れていることを主張し、他の宗旨を低劣なものとおとしめたり、誹つたりして言い争うことがあったようです。これは今日でも全く同じです。

他の宗教を誹ることは、相手と対立するばかりか、自分の宗教の価値を下げているといえます。佐々木蓮磨師の法味寸言に

「他人を悪罵するは、自己を悪宣伝するに等し」

とありますが、それをここでは他の宗旨を誹ることはかえって「みずから、わが法を破謗するにあらずや」と言われるのです。

自分の宗教は他の宗教よりも勝れていると思うことは凡夫としては自然の情であるとも言えます。というのは自分の宗教が劣っていると思つて信奉するとは誰しも心穏やかにはなれないからです。

自分の奉じている宗教を勝れていると思うことは凡夫の情として自然としても、自分の宗教が勝れていると思いたいという凡夫の心情の底に我愛我慢の自我心があると云えます。人は「人に負けたくない。人よりも優位に立ちたい。自分を否定されたくない」という自我の煩惱があります。

この自我の煩惱を離れることははなはだ難しいけれど、この煩惱が暴れないように気をつけていくことはできます。

ところで、何かの縁で他の宗教の人たちとやり合うと、それが縁となって「人に負けまい」とする煩惱が盛んに起こってきて、互いの宗教の優劣を競い合つて言い争い、他の宗教の人たちと対立してしまします。

『宝積経』には

「誣論のところにほもろもろの煩惱おこる、智者遠離すべき」

とあって、宗教論争はするなと戒められています。宗教論争をすると、「他に負けまいとする」煩惱、我執我愛の煩惱が跋扈するから、他の宗教の人と論争を避けよ

との仰せであります。

しかも宗教論争はそれだけにおさまらず悪くすると宗教戦争の火種となる場合があります。論争は紛争となりかねません。宗教がらみの戦争ほど始末に負えない戦争はないのです。単なる経済戦争なら、互いに大きな損失が出れば速やかに止めることも難しくありませんが、宗教戦争は利害損得だけでお互いが引き下がれないこだわりがあつてなかなかおさまりがつかないのです。こういう事例はかつての世界史の上だけでなく、現代の世界の状況にも見いだすことは難しくありません。

なお付言すれば、「私の教えが最高、他の教えは劣っている」あるいは「他の宗教は邪教である」と言う言葉をよく耳にしますが、こうした非難は、他の教えを謙虚に学んだ上での発言ではなくて、他の教えをろくろく学びもせず、あるいは学んでも頭から偏見でもつて見ている場合がほとんどです。

時として他の宗教を批判しなければならぬことがあるありますが、その場合自らの偏見をできるだけ離れてよく学んだ上で行わなければならないでしょう。(了)

## 【盂蘭盆会法要】

8月16日(金)  
午後2時より

\*8月22日の同朋会は  
休みます。

# 七里和上

明治期に活躍された七里恒順師(和上)は名師として世に名高い方でした。博多の万行寺に住し、遠近各地の多くの御同行を導きました。ことに称名念仏の実践を通して真宗信心を説かれました。

その七里和上の法語に

「お浄土参りは間違いないと自分に明白になったがご信心と思いなさるかや。それが大きな間違いじゃ。信心というは本願を疑わぬが信心なり。そこで本願に疑いさえなければ、その外は心がどうあるうとも大事はない。元より心の判然とせぬのが凡夫じゃ。その判然とせぬままの凡夫を助けてくださるのが弥陀如来のご誓約じゃないか」とあります。

これは大事なことを言っておられます。まず「お浄土参りは間違いないと自分に明白になったがご信心と思いなさるかや。それが大きな間違いじゃ」とのお言葉であります。

これは「私は浄土にお参りすることができる」と、自分の心にハッキリと思われたり明白になったりしたのが信心だと思えますが、これがまちがいのなものです。聴聞を重ねれば、浄土がハッキリし、浄土へ生まれることがハッキリし、阿弥陀仏がハッキリし、自分がハッキリし、自分の罪が明白になり、そのように自分の心に浄土や仏や自分自身の本性が明白になり判然としたのが信心と思ったり、あるいは判然とすれば安心ができると思っ

ているが、それが大まちがいである、との思召しであります。

これはよくある聞法上のまちがいです。仏や仏の働きや仏の慈悲がハッキリと自分の心に確かになるのが信心と思ひ、あるいは自分や自分の罪悪がハッキリと自覚できるようになるのが信心と思ひますが、七里和上はそうではないと言われるのです。

私の心はいつまでたっても、いつまで聴聞してもハッキリしないものです。いつまで聴いても浄土が我が心にはつきりするわけではなく、浄土と聴いてもボンヤリとしたもの。阿弥陀仏とはこれこれこんなお働きといくら聴いても凡夫の心にはいつまでもぼんやりしたもの。自分の罪悪性をいくら聴聞してもハッキリと罪悪深重と自覚できるかという、少しは知れてもぼんやりしたもの。

凡夫の心はいつまで聴聞しても、これでハッキリしたとか明白になったというもの、凡夫の心に出てくるものではないです。だからこの心をハッキリさせようと聴聞しても、千年たってもその時は来ないのです。

浄土とはどういう世界か、阿弥陀仏とはどういう仏か、自分の罪悪性ほどれほどか、そういうことがハッキリしてから信じるのでもなければ、そういうことが我が心にハッキリしたことが信心でもありません。我が心はいつまで聴聞してもハッキリしてくれないのです。だからこそ「出離の縁あることなき身」なのです。私の心に仏や浄土や自己の相がハッキリするのなら、それを縁として救われもしようが、なにせ我が心ほど煮ても焼いても言うことをきかぬものはありません。

感激して、仏が分かったつもりになっても、しばらくするとぼんやりする。自分の深い罪悪性が自覚されたと一時は思っても、それはその時ばかりの自覚であって、また元の心情にかえっている。

だから我が心を明白にし、クリアーにしようとするのは、いまだ我が心への信頼があるからです。それは我が判然とした心を救いの手がかりにしようとしているのです。

では何がハッキリしているのかといえ、私の本願のみ言葉です。阿弥陀仏の第十八願「すなわち十念に至るまで、もし生まれれば正覚を取らじ(かならずタスケルで念仏申せ)」との誓約のお言葉です。七里師はこのところを

「浄土に参れぬはずの者なれども本願の御誓約で、必ず参らせてやるに間違いな」と喚んでくださる。凡夫の方ではただそのお言葉一つを目的に信じるばかりなり。その必ず助くるのお約束のお言葉を、目的にしたが信心なり」

と言われます。仏のお言葉を信ずる信心です。ハッキリしているのは仏のお言葉です。そのハッキリしている仏の言葉をその通りに聞き受けているばかりです。私の心をハッキリさせるのではないのです。

しかるにこの仏語をさしおいて、我が心にハッキリさせようとして我が心に向かうゆえ方向がちがひとなります。方向ちがいの聞法となるのです。そのところを七里師は

「しかるに如来様の仰せをのけておいて、浄土へ向いて参れるか参れぬかを考えるゆえ、しかと安心ができぬなり。それは向き処を違えておるなり。安心は浄土へ

向いて参れるに間違いないと安心するではない、如来様のお喚び声に向いて安心するなり。助けてやる参ることを引き受けてやるという、お喚び声に安心するのじゃ」

と仰せられ、如来の「タスケル」の仰せに安心するのであるとご教示くださるのです。(了)

## 住職つれづれ雑感

6月3日から7日まで今年も福井別院へ。朝6時半からの晨朝と昼1時からの速夜があつて、毎日法座が開かれている。お朝事は1名ほど、速夜は8人ほどのお参りである。参詣者は少ないということよりも、毎日お参りする人があることの方が驚きかも知れない。午後3時には法座が終了するので、次の朝までは役目はない。かなりの時間がフリーとなる。4時半には風呂ができて、5時すぎると夕食が運ばれてくる。午後のひとときは外に散歩に行きたくなる。泊まっている本堂地下の部屋に一日いると、いささか息苦しくなるものである。それでも今年はずっとパソコンを持参して原稿を作ったり、考えたものを入力したりして、息苦しさをあまり感じなかった。別院近辺の福井の街は見るほどの珍しいものはない。もう見慣れた風景であるが、道路は整然と広く街並みはゆったりとして地方都市としての静けさがあり落ち着いている。だから散歩していて気持ちがいい。ただ落ち着いた街並みは裏から言えば何となく活気がないともいえる。街を歩いていると帽子屋があり入ってみる。欲しかったパナマ帽が店内に並んでいた。案外和服と合うので買った。店の初老の女性店主であろうか、親切に説明してくれた。6月9日。朋友会で林氏の響命精舎へ。入り口から玄關まで花の鉢植えで囲まれている。法友の皆さんの元気な赤ちゃんを見て同喜し安心した。